

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：60部
ひなち地区：200部
つつが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

森林を壊す

シカ異常増加

シカの食害多発地域では、有害駆除、管理捕獲、樹木保護、防護柵などによる被害防除に取り組んでいます。今のところ成功の事例が無く、シカは今も増え続けています。

今、起っているシカの異常増加は、ほぼ人為的な原因で起きています。ことの始まりは、保護政策。次に、拡大造林による森林の人工林化です。

その次に、林業の衰退です。輸入規制緩和により廉価な外国産木材が入って来るようになり、国産材の需要は長期にわたり停滞し価格の低迷などから林業は衰退し、日本国土の3分の2を占める森林が荒廃を極めていきます。紀伊半島の人工林化率は全国平均以上で異常に高いといわれています。また、今「狩猟圧」の低下がクローズアップされています。

食物連鎖の頂点捕食者、オカミの絶滅以来人間の狩猟によってシカの増加はどうか

抑制されてきましたが、その狩猟も狩猟者の減少、高齢化などによって狩猟圧が低下し、シカの増加を抑制するには困難な状態になっていくなど、輻輳的要因が絡み合っている。日本の森林生態系は大変な状態になっていきます。

森林が森林として生き続けるためには、生態系のバランスが常に適切に保たれていることが必要です。特定の種だけが増え過ぎるということは森林に生息する多くの生き物や植物にも大きな悪影響を及ぼします。微生物の世界でも同じことが起こることがあり、病虫害も生態系のバランスに乱れが生じた場合の現象なのです。

異常増加でシカは減らなくなり、有毒植物の皮剥も起きています。宮川村ではシキミ、大台町ではアセビの樹皮にシカと思われる食痕がみられています。有毒植物を食べなければならぬほどに個

体密度が高くなり、裸地化も進んでいます。飢えたシカは地面を掘り起こして根っこまで食べるため土地は荒れて植物が育たなくなりますが、森の次代を担う若木を喰い、親木の樹皮を剥いては枯らし森を壊しています。

その地域を食べ尽くすと、他の地域を荒らすという悪循環で裸地化する森林が拡大しています。下草がなくなつた森林では斜面の崩壊の兆候を呈して、その破壊は二度と元の状態に戻らない不可逆的な可能性がります。

森林は、木材生産は無論のこと水源かん養や、それに伴う洪水の緩和機能など国土保全に関わる様々な機能を有しています。森林が裸地化すると、これらの機能は失われます。昨今、起っている大雨による山の崩落なども、その影響が無いとは決していえません。環境省の指標ではシカの適正生息密度は、人工林においては、被害があまり大きくならない密度は、1平方キロ当たり2頭。天然林では、植生に目立った影響が出ない密度は、1平方キロ4頭といわれています。

響かない密度は、1平方キロ4頭といわれています。損なわれた森林環境を取り戻すには、シカを本来の自然生態系にふさわしい適正密度に管理する必要があります。狩猟者の減少で管理体制を支えてきた大黒柱は細くなる一方。昔から、自然資源として肉や皮を入手するために古くから行われてきた身近にあったシカの利用知識を失いつつあることが、シカ問題をより深刻にしているのかも。何れにせよ単年度で結果が出る問題では無く長期的な視野が不可欠です。今後のシカ管理を担う体制をいかに構築するかが今問われている課題です。次世代のためにも国を挙げて取り組まなければならない重大な問題です。

名張B群の行方

名張農林資源室によると、

源室によると、名張B群は、本年6月中旬から行方不明の状態であるということが分かりました。平成27年度名張農林資源室が実施したモニタリング

によると、

オトナオス3頭。オトナメス12頭。ワカモノオス2頭。ワカモノメス1頭。コドモ17頭。アカンボ5頭。総数40頭でした。

翌年28年1月3月にかけて、宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会は名張B群の全頭捕獲を目ざし大量捕獲を実施。大量捕獲数27頭に加えて5頭の有害捕獲。合計32頭という大量捕獲でB群個体数は壊滅的に減少しています。

近年、サルの駆除が全国的に増大している

「厄介者は殺せ！」対策です。当面、目の前からいなくなれば、「農作物被害が減少する。それでいい。」その先のことは誰も追求しない。駆除の効果の是非は誰が検証するのでしょうか？。誰もしていない。これが日本で行われているサル捕獲対策の現状ではないでしょうか。サルの捕殺を、世間体をおもんばかり個体数調整と正当化した対症療法的やり方は、どこか根本的な誤りがあるように思われます。地域的に絶滅を招く恐れもあります。

壊滅的打撃を受けたB群は、消滅したかもしれませぬ。また、酷暑のため想定外の山奥に潜んでいるのかも。もし消滅していたら、そこに隣接群の進出が考えられます。消滅していなかったら、近い将来、元の頭数を回復することは間違い無いでしょう。これが駆除という行為後の全国各地の実情であります。何れにせよ再度、遊動域全体を探索し、消滅の有無を確認すると共に今後の対策を考える必要があります。

れもあります。B群は、消滅したかもしれませぬ。また、酷暑のため想定外の山奥に潜んでいるのかも。もし消滅していたら、そこに隣接群の進出が考えられます。消滅していなかったら、近い将来、元の頭数を回復することは間違い無いでしょう。これが駆除という行為後の全国各地の実情であります。何れにせよ再度、遊動域全体を探索し、消滅の有無を確認すると共に今後の対策を考える必要があります。

とところが現在問題になっている絶滅は、自然で起る絶滅とは根本的に異なり、人間の手にする乱獲や大規模な環境破壊が大きく影響して、人間の活動が種の絶滅を促しているといえます。

私達は自然の恵みを受けて生活しています。一種類でも生きものが絶滅するとその恵みを受けられなくなってしまう。

あの蚊の幼虫ボウフラでさえも、水中生物達の貴重な栄養源となっているのです。現代の種の絶滅や異常増加は、今までありえなかったスピードで起こっており、人間の活動がその主たる原因と考えられています。明治期には二ホンオオカミやコウノトリが姿を消しています。※(コウノトリは国内野生

H 28年	笠間	深野	安部田	井手	黒田	矢川	星川	長瀬	中村	古大野	上三谷	長坂	宇龍口	伊竜口	西谷	砥取	室生
1月		5	16	1	2			3	2			1					
2月		6	14					1					1	6	2		
3月		4	7			3		1						1	12	1	
4月		4	1			5		2	2	1	1			1			
5月		2	14	1	1	2			2			1		1			
6月			11	10				1	2	2				1	1		
7月		1	7	2			3				1	1	2	1	7		
8月			2			1	1				6	6	4	2	7	1	
9月							2				4		4	4	16	3	
10月			1								3		1	12	18		
11月			1			3					2	3	2	13	8		
12月											2		1	15	14		

H 29年	笠間	深野	安部田	井手	黒田	矢川	星川	長瀬	中村	古大野	上三谷	長坂	宇龍口	伊竜口	西谷	砥取	室生
1月											5		1	8	8	1	
2月											1			31	1		
3月											1			34	1		
4月													1	8	9		
5月			3									1		1	12		
6月			19											1			
7月		10	3					1		1							
8月		6	2			2		4		1			1				
9月		1	2							1	2	5			5		
10月											3	5			6		
11月						3					7	1			3		
12月		3	2			2		3	1			2		1	10		

H 30年	笠間	深野	安部田	井手	黒田	矢川	星川	長瀬	中村	古大野	上三谷	長坂	宇龍口	伊竜口	西谷	砥取	室生
1月			2						0		2	1		5	4		
2月									※13						7		
3月									※2	1				8	6		
4月															13		
5月			2											2	5		
6月															6		

上図は27年の大量捕獲より30年8月までの出沒経緯。H30年に入り宇陀市西谷・名張市竜口への出沒が多くなった。以後所在不明？。28年1月～3月は大量捕獲期間です。

種々の絶滅と生態系

人類が地球上に現れるよりはるか昔から生きものは自然の摂理のなかで、長い時間をかけてある種が減り、別の種が増えるという自然の力が働いて生態系のバランスが図られていました。

ところが現在問題になっている絶滅は、自然で起る絶滅とは根本的に異なり、人間の手にする乱獲や大規模な環境破壊が大きく影響して、人間の活動が種の絶滅を促しているといえます。

私達は自然の恵みを受けて生活しています。一種類でも生きものが絶滅するとその恵みを受けられなくなってしまう。

あの蚊の幼虫ボウフラでさえも、水中生物達の貴重な栄養源となっているのです。現代の種の絶滅や異常増加は、今までありえなかったスピードで起こっており、人間の活動がその主たる原因と考えられています。明治期には二ホンオオカミやコウノトリが姿を消しています。※(コウノトリは国内野生

個体が絶滅し海外からの飛来種を保護し、野生化させる活動を行なわれている。なかでも、ニホンオオカミの絶滅は、今深刻化しているシカなど草食動物の異常増加に大きく影響しています。影響が表れるのに時間がかかるために、気が付いた時には手の着けようがないという事態になります。一旦、失ったものを取り戻すのは難しく、時間や費用など莫大なコストがかかることを肝に銘じておかなければなりません。

生きもの絶滅は、回り回って私達に大きな損失を及ぼします。

私達人間も同じ生態系を生きる一員です。長い時間をかけて進化してきた生きもの達と共に暮らすべきだと考えます。

近年、メダカやホタルなどが希少種として手厚く保護管理されるようになってきました。が、つい最近までは普通にみるのができ、当たり前のもので、たいして見向きもされなかつたのです。それが無くなりかけるとその貴重性に気が付き大慌てをしています。すでに遅く、次の世代に残らなくなるかも知れません。

また、もともと日本にいなかった外来生物が各地で増殖し、在来の生物多様性の脅威になっています。

研修会開催のお知らせ

ハナレザルによる生活環境被害・人身被害が全国的に増加傾向にあります。つつじが丘では毎日のようにハナレザルによる被害が発生していて、被害対策が必要不可欠な課題となっています。被害を防止するためには、被害実態の正確な把握、サル生態と行動の解明、集落環境の点検・整備など総合的な対策が必要です。つきましては、下記の通り研修会の開催予定しています。ご多用とは存じますがご出席いただきますようお願いいたします。

記

日時：平成30年11月25日（日）
場所：名張市比奈知市民センター
内容：名張A群の動向と対策
シカ・イノシシ被害対策
質疑応答

ひなち地域ゆめづくり委員会
名張鳥獣害問題連絡会
名張市農林資源室
三重県伊賀地域農業改良普及センター

チョット一服



シカの角の話

現在のシカの年間駆除数は40万頭前後。一般の狩猟も加えれば、その倍近い数が年間捕獲されていると思われます。仮に捕獲数の半数が雄シカとしても角や毛皮は膨大な数になります。雄シカの角は、昔から刀掛けなど、生活の中で様々な活用されてきました。人間の都合による野生動物の駆除には心が痛みます。駆除された野生動物を何らかの形で、活用することで人間としてのせめてもの償いが果たせるのでは

ないかと思えます。とは言え、シカの角や皮は現代では需要が少なく処分に困っていましたが、シカの角を「ドッグガム」として商品化する企業が出てきました。シカ角ドッグガムは100パーセント天然素材なので健康面においても安心ということでも需要が増えているそうです。「ドッグガム」とは、犬が「噛むおもちゃ」のこと。鹿皮（ディアスキン）は歴史が長く、1300年も前から印伝（いんてん）といって広く一般に愛用されてきましたが、現在では需要は激減しています。現在、製法が伝わっているのは甲州印伝のみといわれています。

サル情報

名張A群は、暫く出没が無かった長瀬、布生、神屋方面にも出没がみられます。つつじが丘のハナレザルは相変わらず出没していて、最近では行動域を拡げつつあります。ハナレザルは行動域は決まっておらず、100キロも移動した事例もあり群れが生息していない地域にハナレザルが出没することがあります。滅多にサルを見かけない地域で一頭で徘徊しているサルはハナレザルと思ってお警戒をして下さい。つつじが丘由来のハナレザルは人慣れが進み凶暴化しています。厳重な注意が必要です。

A・B群両地域に注意が必要です。サル問題に限らず、イノシシやシカなど、これから野生動物問題は市街地でもますます大きくなっていくでしょう。対策側の組織力・機動力・技術・情報能力など対策の実践をとおして対策活動を高めていく必要があります。名張B群は、名張農林資源室の情報では受信無しばかりで7月中旬からその所在が分からなくなっています。平成29年末頃から特定の集落

に依存するなど、不安定な行動をしてみましたので、群れの消滅を心配していた矢先の出来事です。消滅の有無を確認すると共に、今後の対策を考える必要があるということ、先日、古川さんと、再度遊動域全体を探索してきました。室生寺を超へ、宇陀市榎原牧場方面まで足を伸ばし聞き込みを行いました。『宇陀市森林組合では宇陀市榎原牧場付近で、7月初旬1頭目視した人がいる。宇陀市古大野では、7月末から4〜5頭の群れやハナレザルとおぼしき1頭が目撃されていて居付き状態。野菜などに被害が出ている。B群の存在が確認できたことは大きな成果だと思えます。B群では電池は既に消耗していると考えられますので、今後は地域住民への聞き取り調査が重要になってきます。発信機が池切れは、発信機を埋め替えて捕獲しなければならず、時間がかかりすぎます。サルの位置情報は対策上不可欠で地域全体が共有する必要があります。テレメトリングが駄目なら聞き取り調査を優先する必要があります。

名張B群移動状況 平成30年7/21～平成30年8/20

名張A群移動状況 平成30年7/21～平成30年8/20



聞き取り情報
宇陀市古大野では、7月末から4〜5頭の群れや、ハナレザルとおぼしき1頭が目撃されていて農作物に被害が発生している。宇陀市榎原牧場付近で、7月初旬、1頭目視されている。青葉の滝周辺では、7月末2頭目視との情報がある。※地域でのサル位置情報の共有を図りましょう！

丸印内の数字は出没日
白抜き数字はハナレ
受信不能日